

**秋冬ねぎでネギハモグリバエ、シロイチモジヨトウが多く確認されています！
ほ場をよく見回り、必要に応じて防除を行いましょう！**

1 作物名 秋冬ねぎ

2 発生現況

- (1) 10月中旬の巡回調査の結果、広域でネギハモグリバエの被害やシロイチモジヨトウの寄生が確認された。
- (2) ネギハモグリバエの発生地点率は55.6%(平成43.3%)で平成並、被害株率は29.3%(同12.6%)で平成より高かった(図1)。
- (3) シロイチモジヨトウの発生地点率は44.4%(平成5.6%)で平成より高く、50株当たりの寄生頭数は6頭(同0.5頭)で平成より多かった(図2)。

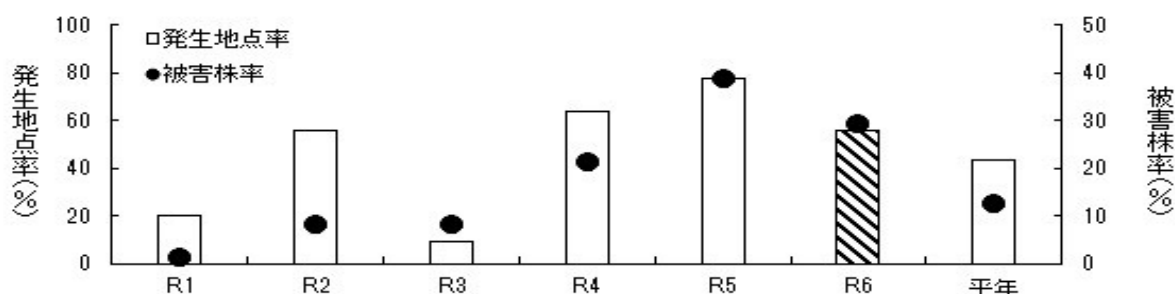


図1 ネギハモグリバエの発生地点率及び被害株率(10月中旬)
(平年値は、平成26年～令和5年の10か年平均)

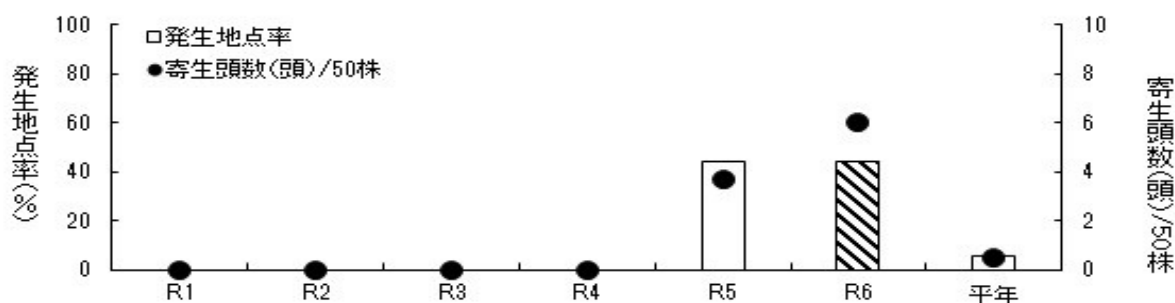


図2 シロイチモジヨトウの発生地点率及び地点(50株)当たりの寄生頭数(10月中旬)
(平年値は、平成28年～令和5年の8か年平均)

3 防除のポイント

(1) 共通事項

- ・本年は高温で経過したため、ねぎの生育後期まで害虫による加害が長期間続いており、一部では被害程度が高いほ場もみられる。ほ場をよく見回り発生に注意し、必要に応じて薬剤防除を実施する。
- ・害虫の薬剤抵抗性発達防止のため、IRACコードが同じ薬剤の連用を避け、計画的にローテーション散布を行う。

・薬剤については『宮城県農作物病害虫・雑草防除指針』を参考に選定する。

<https://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/miyagi>

(2)ネギハモグリバエ

- ・翌年の発生につながるため、ねぎの被害残渣は速やかにほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- ・従来のネギハモグリバエに加えて、著しい食害痕を呈するバイオタイプB(以下、タイプB)の発生が広域で確認されている(写真1)。タイプBは秋冬ねぎの生育後半から増加し被害が拡大する傾向があるため、ほ場をよく観察し、必要に応じて防除を行う。

(3)シロイチモジヨトウ

- ・若齢幼虫は集団で表皮を残して食害し、食害部は白く透けて垂れ下がる(写真2)。
- ・中齢以降は分散して葉身内に食入し、内側から食害するため、虫糞が葉身内部に堆積して品質低下の原因となる。
- ・葉身内に入ると薬剤がかかりにくくなり、中齢以降は薬剤による防除効果も低下するので、防除はできるだけ若齢のうちに行う。
- ・本種は特に薬剤抵抗性の発達が早いため、IRACコードが同じ薬剤の連用を避ける。また、被害葉の除去、卵塊・幼虫の捕殺などの物理的防除を組み合わせる防除を行う。

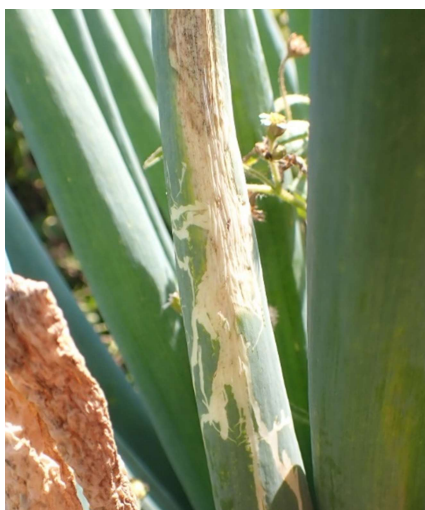


写真1: ネギハモグリバエ
(タイプB)被害痕

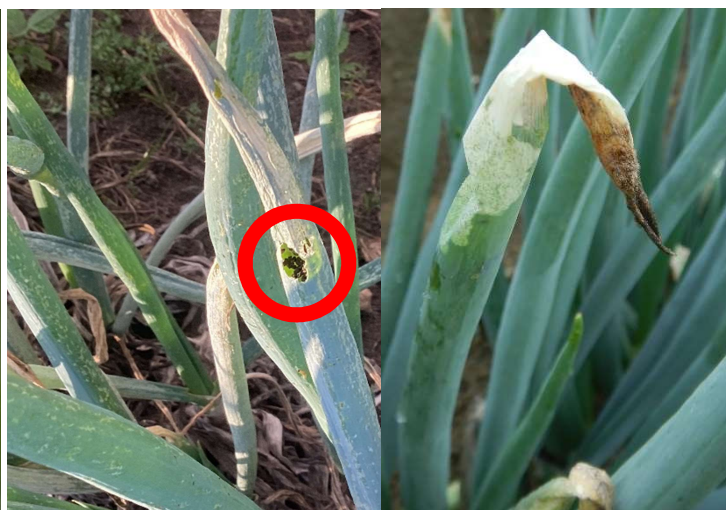


写真2: シロイチモジヨトウ被害株
(赤丸内: 食入痕と虫糞)



写真3: シロイチモジヨトウ中齢幼虫(体長 20 mm程度)

《お問い合わせ先》

宮城県病害虫防除所

〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17

TEL:022-275-8982 FAX:022-276-0429

E-mail: byogai@pref.miyagi.lg.jp

★宮城県病害虫防除所から『メルマガ』で
発生予察情報の発表をお知らせしています★



宮城県病害虫防除所
トップページ



メルマガ
登録フォーム